

「誰もが居場所を持てる社会へ」

小田原市立国府津中学校

三年 野村 夏輝

人は誰しも、間違えることがある。しかし、その一度の過ちで一生を否定されてよい理由にはならない。罪を犯した人がもう一度社会で生き直そうとするとき、必要なのは「支え」と「理解」だ。刑務所を出た後の人たちが再び犯罪に走ってしまう理由の多くは、社会の中に自分の居場所を見つけないことができず、社会を明るくしないことにあるらしい。「社会を明るくする運動」は、犯罪のない地域を目指すだけでなく、過ちから立ち直ろうとする人々を支えるための運動である。この運動が意味する「明るさ」は、ただ犯罪が少ないという数字ではなく、誰もが安心して暮らせる、寛容と信頼のある社会こそが「明るい社会」だと思った。

人は「普通であること」から外れた存在に
対して、無意識のうちに距離を置いてしまう
ことがある。例えば、一度罪を犯した人、保
護観察中の少年、あるいはその家族。そうい
った人々に対して、「関わりたくない」「怖
い」といった感情を抱く人は少なくないと思
う。しかし、その感情の多くは、「知らない
こと」から生まれている。

更生とは、単に過去を反省することではな
く社会の中で信頼を取り戻し、自立して生き
ていくことが真の更生だと思う。ところが、
仕事を探しても過去の経歴で断られ、住む場
所も借りられない。周囲の目が冷たく、自分
にチャンスが与えられない社会では、どれほ
ど努力しても心が折れてしまうのだろう。だ
からこそ、「理解」と「協力」が必要なのだ
と思う。例えば地域でのボランティア活動、
学校での人権教育、雇用の場での受け入れな
ど身近なところから手を差し伸べることがで
きる。人は支え合うことで変わっていける存

在であり、見守るまなざしが人を育てる。

また犯罪を未然に防ぐには「孤立させない社会」をつくることも重要だと思う。家庭の事情や学校でのいじめ、貧困など、少年犯罪の背景には多くの社会的問題が潜んでいる。もし、誰か一人でもその苦しさに気づき、声をかけていれば、事件は防げたかもしれない。

「社会を明るくする運動」は、特別な人だけが行う活動ではなく、自分の周りで困っている人を見過ごさず、耳を傾け、できることをする。その小さな行動の積み重ねが、やがて大きな支えになる。見えない場所で孤独に耐えている人にとって、その一言が救いになることもある。過ちを悔い、やり直そうとする人に対して「もう一度信じてみよう」と言える社会。誰もが自分の存在を肯定できる社会。そんな社会こそが、本当に明るい社会だと信じたい。今、自分にできることは何かを問いながら、一人ひとりが意識を変えていくこと。それが、「社会を明るくする運動」の

本当の意味なのではないだろうか。